

# エンドレス・シュガーレス・ホーム

## 鳥居

エンドレス (Endless) 終わりがいいこと

シュガーレス (Sugarless) 糖類が 0.5g 未満であること

ホームレス (Homelessness)

「家」や「家庭」というものを思い浮かべるとき、ぐらぐらと 急に足許が おぼつかない 不安定な気持ちになります。

もし 「帰ることができる“家が、ない”」ということも、ホームレスに含めるのであれば、

幼い時から 私はホームレスでした。

ある夕方、 学校へ向かいました。

その学校には 制服がなく、生徒はみな 私服です。

学校へ向かう途中、コンビニで パンと水を買いました。

学校に着き、私は、どの教室に向かうべきか を考えていました。

廊下を歩いていると、美術室を見つけました。

私は、昔から絵が大好きです

ひとけのない、その教室を開けると 幸い、誰もいませんでした。

速やかに 後ろ手で教室のドアを閉めると、通常なら どの教室にもある  
縦長で灰色の箱（掃除用具入れ）を確認し 携帯電話の電源を切りました。

そしておもむろに中へ入りました。

掃除用具入れは、元々 人が入るための場所ではないのですから、

足下には バケツや 雑巾があり、また うす暗く狭い空間には 私以外にも  
左右前後に埃付きのほうきが、ばらついて立っていました。

私は唯一の荷物である、 パンと水が入ったコンビニの袋を、 そっと足下（おそらくバケツの中）に下ろ  
しました。

もう荷物はありません。 腕にかかる負担がなくなり、楽になりました。

この体勢のまま、私は 夜まで待たなければいけません。

せめて 学校を見回る守衛さんが、いなくなるまで。

---

何時間も、 時間が経ちました。

物音がするたびに 息を潜め、突然のチャイムの音に心臓が驚き、そうしながらも とても長い時間、

じっと 同じ体勢で 1人、 私は 誰にも知られずに 掃除用具入れの中に立っていました。

守衛さんらしき足音が遠のき、見回りが済み

完全な無音が訪れ ようやく何者もの気配を感じなくなったとき

やっと 私は緊張しながら、掃除用具入れから 外へ出ました。

---

窓の外は真夜中。 月明かりに照らされた 薄暗い教室。

普段視ることのない 夜の美術室の光景に 心を奪われました。

無事に 外へ出ることができ、安心すると同時に

やっと自由になれたのだ。という気持ちが 全身に広がります。

教室の机が、つるつると 月光を反射させているのを眺めながら

買ってきた水を飲むことにしました。

水は 心地よく なめらかに 私の喉に 流れていきます。

すごく自由な気持ちです。

それは 何時間ぶりに

やっと あの狭い掃除用具入れから、 広い教室へ 出てくることのできたから。かも知れないし、

あるいは 今、

“世界中の 誰1人として 私が どこにいるのか、 知る人は、いないから ”

それは つまり

誰にも ( 家族にも ) 見つかる心配も、( 殺される心配も ) しなくて良い。

ということだから

だから、 きっと こんなにも

自由な気持ちなのかも 知れません。

危険な目に 遭わされる心配が ない、 ということは、 こんなにも 自由です。

家がないことは

こんなにも のびのびとした 自分自身の心を 取り戻すことができます。

今夜は 月が とても綺麗です。

#### 選評

この作品は詩の言葉で書かれています。夜の美術室の光景がとても美しいですね。でもその美しさにたどり着くまで、地獄というか戦場というか、そんな場所に閉じ込められていたわけですね。掃除用具入れは、いわばそこから脱出するためのタイムマシンのようなもの。夜の美術室が美しい理由は、最後の段落に書かれています。「家がないことは こんなにも のびのびとした 自分自身の心を 取り戻すことができます」という凄絶な言葉に。鳥居さんが生き延びているのは、この美しく強い言葉を持っているからですね。言葉というシェルターを持ち、ホームのない場所、象徴的に言えば「路上」というシェルターを持っていたからだと思います。

(選者・星野)